

京交山岳部報

No.303

'78 1月号



今年も元気で

楽しく

山に登ろう

[第1158回例会] 畑 名誉部員還暦お祝い登山

馬谷山 二等 \triangle 750.2m (R)

日時 1月8日(日) 9.00 162号線笠峠トンネル出口集合
担当者 本局 宮後正樹 (TEL 251) 申込み〆切 5日(金)
記念品代 500円(家族は除く。)参加者以外で、ご賛同の方は大槻 (TEL 268) まで申し出て下さい。 1/5万円「四ツ谷」
備考 山頂でぜんざいをする予定ですので、各自もち2個と食器を持参して

[第1159回例会] 30周年 京都府下30山 その1

ください。

由良ヶ岳 (R)

日時 1月11日(水) 6.40 京都駅山陰線ホーム集合
コース 京都一綾部一西舞鶴一丹後由良…由良ヶ岳
担当者 九条 田中忠久 (TEL 351) 申込み〆切 9日(月)

[第1160回例会] 福知山

親不知 三等 \triangle 604.6m (R)

日時 1月22日(日) 6.50 二条駅集合
コース 福知山一箕越一室…峠… \triangle 親不知…市貝…丹波竹田(福知山線)一京都
担当 本局 坂井久光 (TEL 629) 申込み〆切 20日(金)

企画運営リーダー会

1月20日(金) 徳野宅

[第1161回例会]

ボンボン山

(R)

日 時 1月29日(日) 8.00 国鉄山崎駅前集合
コ ー ス 山崎…天王山…柳谷…ボンボン山…善峰寺一東向日(阪急)
担 当 者 名誉部員 近藤 薫 (TEL 075-961-0185) 申込み〆切
27日(金)
備 考 山崎オリエンテーリングと協賛します。

新年会 兼 集 会

日 時 1月11日(水) 午後6時30分から
場 所 下鴨寮
費 用 約2000円
申 込 み 本局 木下 (TEL 297) 〆切 6日(金)



松くい虫と虫くい松

宮 後 正 樹

松は常緑の針葉樹で長寿にして厳寒にも色を変えず昔から節操・長寿の譬えに用いられるとともにマツと並んでタケ・ウメを松竹梅、または歳寒三友ともいい、ともに風雪や厳冬に耐え、あるいは他の植物に先がけて花を開くところからめでたいものとされ、画や染物、彫刻の図柄にしたり、正月や慶事用の飾物として盆栽やいけばなにも使用されている。

正月の門松はそんなに古い習俗でもなく、昔はサカキやシキミを立てたが松の常盤(ときわ)、樹木中の首木、色彩のうえからめでたいものとして松に代えられ普及するようになった。しかしこれも自然保護の見地から廃止をやかましく云われた時期があったが昨今はどうであろうか。

松の種類は世界中では100種近くもあり、葉は束生し2本あるいは5本ある二葉松、五葉松が普通で、まれに3本のもの1本のものも見られる。日本にはアカマツ・クロマツが二葉松で、チョウセンマツ、ヒメコマツ、ハイマツ、ヤクタネゴヨウなどが五葉松である。またクロマツは海岸地帯に、アカマツは低山帯に、ハイマツは高山帯に、ヤクタネゴヨウは屋久島、種子島に限られている。松島(アカマツ)をはじめ天の橋立(クロマツ)、厳島に代表される名勝地はもちろん特に日本には松が多く樹齢が長いので全国各地に松の名木や老木、巨木が多く、いろいろと伝説や物語りが伝えられ、また神仏化され自然崇拜という習慣が今もなお残されているものもある。

この松が今、日本全国でどんどん枯れているという。鞘翅目に属するマツクイムシの被害である。マツクイムシといってもその種類は多く、キクイムシ科に属するマツノキクイムシ、マツカワノキクイムシ等をはじめゾウムシ科に属するもの、カミキリ科、タマムシ科などがある。

マツクイムシの被害発生の原因には、自然的なものとして松の老衰、衰弱があり、気象的なものとして風水害、干ばつ、雪害などがあり、人為的なものとして伐採、極端な樹脂の採取、下生えの採草、山火事、煙害などがあげられているが、なかんづく高度経済成長による自然の生態系を無視した無茶な自然破壊や車の増加による排気ガス公害がもたらした後遺症として松を弱らせマツクイムシの寄生加害を許してしまったのである。健全な松だと松ヤニに巻かれてマツクイムシは死んでしまうのだが弱った松の木はマツクイムシにねらわれ増殖しはびこって加害して行くのである。

先日来、兵庫県の垂水、和歌山県の白浜と会議のため訪れる機会があったが、いずれも車中、現地とこの松枯れ、虫くい松が目立って多いのにびっくりさせられた。特に国道や高速道路沿いの陽のよく当たる斜面にあるアカマツが多く被害にあっているようである。白浜では「最近松くい虫の大流行に県当局も頭を痛めているそうです。」と観光バスのガイド嬢が説明をしていた。緑と紅葉の山肌に赤茶けた無惨な姿をさらしている虫くい松を見ているといかにも日本列島改造の亡霊のように痛ましく大自然からの仕返しとして心を射される思いだった。

虫くい松はいち早く切り倒し、皮をはぎ、焼却してその根絶をはからないといくらでもはびこって次から次へと松を枯らして行くのである。公害に加えて最近では豊富な燃料事情と人手不足のため切り倒して焼却するにも人と金がかかり、おまけに虫くい松は油っ気がなく火力も弱く焚木にも向かないとあって悪循環が松枯れを助長している。社寺や名城、名勝地などでは厳冬季に向って幹のコモ巻きをはじめ虫退治と松の衰弱予防に必死の防戦をやっているようだが、何よりも放ったらかしの私有林、国有林ともにその所有者は1日も早く虫くい松の処分を断行し、これ以上のまん延を防ぐよう積極的に努力してもらわないと、とり返しのつかない大変な事態になるのではなからうか。(先月号№302のうち第四回目を迎える。は第10回目のミスプリントにつき訂正します。)

第1150回例会

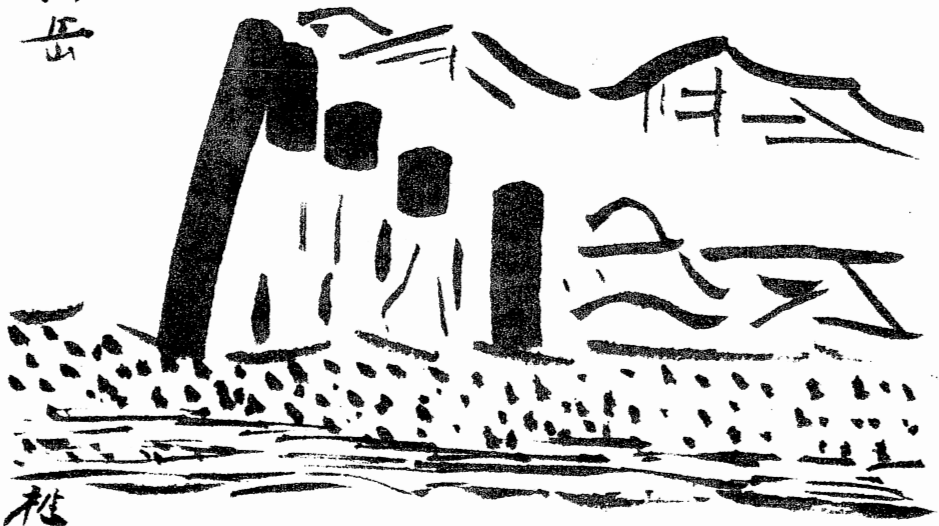
小豆島 拇指嶽

石田幸次

11月11日、20時30分に、京都駅に集合した。5名の参加者、16年振に拇指嶽を訪門する武田、大槻氏。昔話を聞いて意欲満々の三橋、岡本氏、そして今回担当の僕。紅葉を当ててして日程を決定したのだが、秋とは思えぬ暖さに桜が咲いたりして紅葉はわりでしょう。吉田氏の見送りで神戸元町へ。元町駅より元町商店街を通過、中突堤の加藤汽船乗場へ。乗船キップを会計担当の三橋氏に買ってもらって、吉田氏差入の角ピンを開ける。小さなコップが5つ入れてあり、さすが吉田氏とかんしん。大槻氏の横に若い女性が2人、熱心に話しこんでいます。彼女らは同じ船

で高松へ行くOLさんです。23時発のグレイス丸に乗船。神戸の夜景をデッキで見ながら神戸を後にする。デッキにいるのは彼女らと岡本君と僕。武田氏はデッキにシュラフを出して寝てしまい、三橋、大槻氏は船室が満員なので椅子席のルームにシュラフを開けて寝こんだようだ。岡本君と僕は角ピンの残りをチビチビ空けてシュラフに入った。小豆島の土庄には20分ほど遅れて3時50分に着船。土庄の船乗場で6時の一番バスまでシュラフを出してベンチの上で仮眠する。他の客は寒い寒いと酒を呑んだりうるさいこと。シュラフの中だと熱い位だった。眠けまなこで6時の坂手港行1番バスに乗車、安田で下車。車庫から出庫して行くバスを止めてもらって乗りつく。瀬戸内の海から朝日が美しく登っている。橋峠を越えて小さな漁港の橋に着く。橋に着くまで目ざす搦指嶽がチラチラ見えていたが、バス停に降ると搦指嶽は橋の村を見おろすように、デーンとかまえている。武田氏が16年前を思い出しながら先に歩いてベースにする神社をさがしてくれた。バス停より10分ほど搦指嶽に向って登った場所に16年前と同じように神社はあった。搦指嶽の登山コースになっているらしく搦指嶽への登山注意書と登山者名簿が置いてあり、便所、水道が完備してあった。神社を管理されている家を大槻氏がさがしに行っている間に朝食のカップラーメンの用意をする。神社を使用してもいいとのことなので神社をベースにする。6畳の間が2ツほど板戸は少し破れているがテントより快適だ。大槻氏によると使用料はいらないが使用者はいくらかの、寄附をしているとのことなので、1人200円、5人分1000円の寄附をさしてもらおう。朝食を済ませてザイルや三ツ道具を出して搦指嶽への準備をする。神社横のミカン畑を横ぎってキツイ登りにかかり、20分ほどで搦指嶽の小指の下へ出た。乗直の岩場で遠くで見るより高度感はあるようだ。

搦
指
嶽



橋

グレンデと言ってもスケールの大きなグレンデである。大槻氏がコピーしてきてくれたルート図と見くらべてルートの検討をする。右側から小指ルート、初級ルート、ルンゼルート、正面ルート、クラックルート、中央ルート、ダイレクトルートに別れていて、ダイレクトルートは160mの高度があり、見上げているだけで首筋が痛くなる。大槻、岡本氏がまずルンゼルート、80m2ピッチⅢ級、そして僕と三橋氏が初級ルート60m2ピッチⅢ級を登攀することにして、武田氏には適当な場所より写真をとってもらいことにして登攀を始める。ルンゼルートは岡本君がトップ、大槻氏が後から登り出す。初級ルートは石田トップ、後からは三橋氏、初級ルートと言ってもえらい登りである。1ピッチ目をブッシュの中で確保して2ピッチ目のチムニーは、フリーで登って写真をとっている武田氏がトップで取りついて登りきる。ルンゼルートの大槻、岡本氏は、快適なクライミングでクラックルートと合流するブッシュをこえて稜線に出て、小指の上で五人が合流する。小指の上からは、瀬戸内の海が速くまで見えてスバラシイ眺めである。下山は初級ルートをアップザイレンで下り、岩場の下で軽い行動食を取る。午後より正面ルート、クラック一般ルートをアタックすることにする。正面ルートは80m3ピッチⅢ級A1で、クラックルートは、80m3ピッチA1である。正面ルートは、大槻氏がトップで三橋氏、クラックルートは石田がトップで岡本氏、武田氏はフリーで写真班。クラックルートの取付はクラックが斜めなので登りにくい。1ピッチトップで登り小さなテラスで岡本君を確保する。ボルトに自己確保をして、立って確保する。すぐ横では大槻氏が三橋氏を確保しているか、取付で手こずっているようで、岡本君のアドバイスをうけている。見た目よりも正面ルートの方がむづかしいようだ。やっとテラスまで上った三橋氏は恐れをなしてアップザイレンで下りる。残った人でクラックルートを登ることにする。岡本君がトップ、大槻氏がセカンド、ラストが石田の順で登る。2ピッチ目の5mぐらいの一枚岩をアブミを使っている登りである。ラストはアブミを回収しながら登るので、まるで曲芸をしているみたいである。一つ目のアブミを取って二つ目のアブミに足をかけて片足でぶらさがり一枚岩を登りきるのだが、大槻氏にハッパをかけられてやっとこさで凹角の壁を登る稜線にて確保して、3人が稜線にそろった。小指の上には武田氏と稜線を回って登った三橋氏。僕たちも稜線をアップザイレンで下りて小指の上に5人が集結イッポンたてる。朝の間、あんなに天気よかったのに少し雲が出てきた空を気にしながら稜線をクライミング・ダウンで下山する。今夜の食事はうまいだろう。神社に帰り夕食の準備をする。今夜は豪華なスキ焼であるが肉が500gではチト足りないかと武田、岡本君が下のよろず屋まで買出しに行った。大槻氏は神社の使用料を払い、三橋氏はザックや装備の整頓、石田はスキ焼の用意と各自の分担をきめてかかる。買出し組がダンボール箱を持って帰ってくる。「なんでも売ってるね」「食糧もってこんでもよかったで。」ダンボールの中から肉とビールそしてサンマが6匹もでてくる。グレース丸の入港時につかまえたサヨリとサンマをタキ木で焼く。「オーイ、スキ焼の用意ができたぜー。」ビールでカンバイ、サンマをビールの魚にしてスキ焼をつつく。「肉あらへん」と岡本君「あるやないか」と大槻氏。肉のとりあい、これはスキ焼大合戦やでー。ガスランタンの下でのスキ焼はうまいなあー。スキ焼のあとにサヌキウドンのウドンを入れてスキ焼うどん。これで腹いっぱい、折角のごはんが丸々残ってしまった。武田氏のオールドが

回り、ビール5本がカラになり今日の疲れも出て食事のかたづけもほどほどにシュラフを出してゴロリと横になる。囲炉りの火はチョコチョコと燃えて心よい眠けが出てきた。何時の間にか寝てしまう。翌朝4時に武田氏と大槻氏がもう起きている。岡本君はまだグーグー。囲炉りがまた赤々と燃えている。外は雨が少し降っているようだ。昨日登れるだけ登ったのがよかったようだ。朝食はラーメンと昨日の夜に残ったごはん。夕食とくらべたらえらいちがいです。いつでも出られる用意をして雨のようすを見る。9時前に小降りになったので中央ルートに登る用意をして出発する。武田氏はベースに残る。搦指の下まで来たが岩は濡れていていやな感じである。雨もきつくなってきたので中央ルートは断念する。雨具を付けて後線沿いに搦指の頭へ登ることにする。雨でスリッパする稜線の岩根尾を慎重に登る。本峰直下のトラバースをザイルを付けてストーンと落ちこんだ岩をつり上げぎみに登りきった。搦指のツメの先に出た。雨はきついが橋の港、瀬戸内海、草壁の港が薄く霞んで見える。4人とも松の木にビレーをして、おそろおそろ160mの岩の上からのぞく。ハングぎみになった上からだとすごい高度感である。4人とも鎖に繋がれた犬みたいに頂上からの展望を楽しむ。下りはアップザイレンで下りブッシュ帯を通過して小滝の下へ出た。雨はまだ降っている。神社に帰りみんなか装備を整理している間に福田行のバス時刻を確認におりる。昼食を済まして共同装備を分配してバス停へ。5分ほど遅れて福田行のバスが来る。30分ほどで福田に着く。フェリーの時間まで1時間ほど待たなくてはならない。神戸からいっしょに乗船したOLさん2人とまた逢う。彼女らは高松に行って土庄で泊ったとのこと。つり屋さんの多い乗客の中に山屋さんが5人だけ関西急行フェリーに乗船する。2時間ほどで姫路港へ。市バスで姫路駅へ。快速で京都へ帰京。電車、バス、船と乗りついで山行でした。搦指嶽は食糧をもって行かなくてもいいし、神社で寝られるのでテントはいらないし、もう一度行ってみたい岩場です。ザイルと三ツ道具とシュラフだけ持ってね。

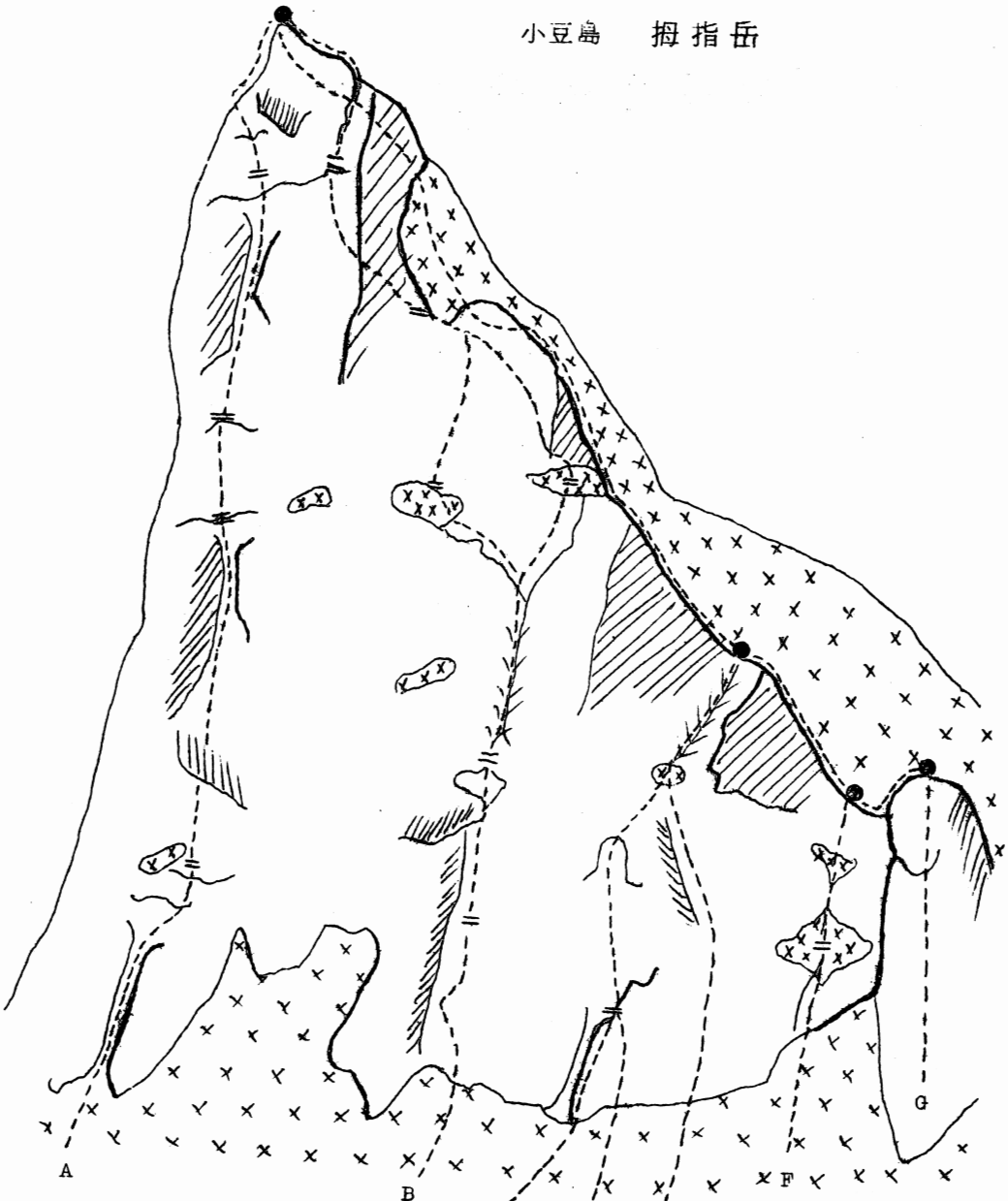
コースタイム

11/11 京都駅 20.30 発 20.54 元町着 21.57 中突堤発 23.00
 11/12 土庄着 3.50 発 6.00 安田着 6.40 橋着 7.00 神社着 7.10 発 8.25
 搦指嶽 8.40 初級ルート ルンセルート 8.45~11.00 正面ルート クラックルート 12.30~14.15 神社 15.00 夕食 17.00 消灯 19.20
 11/13 起床 5.00 神社発 9.00 搦指嶽 9.20 頂上 10.15 神社 11.50 橋バス停 13.10 安田 13.45 フェリー乗船 15.15 姫路港 17.10 姫路駅 17.45 姫路発 18.22 京都駅 18.33

装備表 (共同)

・テント2 ・コッヘル1組 ・ランタン1 ・カラビナ30枚
 ・メインザイル11% 40M1、60M1 ・サブザイル9% 40M2
 ・ハンマー3 ・ハーケン20 ・すてなわ10 ・アブミ5
 (個人) ・ヘルメット ・ゼルブスト ・シュラフ ・アタックザック
 ・雨具 ・食器 ・ブキ

小豆島 拇指岳



A. ダイレクトルート	160 m	五ピッチ	VA2			
B. 中央ルート	180 m	六ピッチ	WA1			
C. クラック一般ルート	80 m	三ピッチ	IIA1	登攀	岡本、石田	} 12日 午後
D. 正面一般ルート	80 m	三ピッチ	IIA1	登攀	大槻、三橋	
E. ルンゼー一般ルート	80 m	二ピッチ	II	登攀	岡本、大槻	} 12日 午前
F. 初級ルート	60 m	二ピッチ	II	登攀	石田、三橋、武田	
G. 小指ルート	40 m	一ピッチ	IIA2			
			-7-			

小豆島ゆきに参加して

三 橋 勉

山ゆきとしては初めての海外遠征?ともいべき小豆島の搦岳へ本格的な岩登りの目的で山へ行く事が今までになかった私にとっては、何か冒険心をそよるような感じがして夢と期待とに胸をふくらませてチョッピリ不安もあったか、神戸港より船に乗りこんだ。

今回の山行は若手の岡本義弘、石田幸次両君と16年前に京交の先輩連中が行ったメンバーのうちの武田、大槻両君も同行してくれたので心強い。

早朝に小豆島に到着して仮眠の後、島バスに乗車する。何しろ冬山に行くような大きな荷物ばかりなので満員であればことわられるところであっただろうと思う。バスから外を眺めると海岸の向うに四国の山並みが見えて意外に四国が近いんだなと思った。途中、道路の橋が工事中でう回する箇所があり6月の集中豪雨で被害があったらしい爪跡があった。バスを乗継いで橋を越えると前方に港が見え、山手の方に目をうつすと、めざす搦岳の岩峰が我々を歓迎してくれているようにそびえていた。

神社で荷物を整理し、朝食をすませた後準備運動をして8時過ぎに出発する。取付点まで約20分、原生林の中のかなり急な登りで一汗かく。バス停付近で眺めた感じと、目前で見上げる感じとは迫力が違う。いよいよ登りだ といところでルート視察の為各ルートの取付点を偵察に行くことにする。取付点は原生林の中にあるので暗い感じがするが岩の前面をまわりこんだところに頂上までのびている垂直の壁があった。義弘君が少し取付いて様子を見ると岩がモロソウな感じなのでこゝは登るのは無理だということで引返すことにする。

頂度向って 左側にあたる部分に、この岩場で落石による犠牲者を出したという遭難の碑がありそのうしろにチムニ一状の取付点からダイレクトルートがあることがわかった。明日登れたら挑戦してみようということで引返す。

草付のある岩場を過ぎたあたりに案内図のとおり立木を登って取付く中央ルートがあり、これで大体の様子が解った。

まず手始めにと一番簡単な初級ルートを石田君と登ることになった。何しろ今年5月に雨でたゞられた芦屋ロックガーデン、8月に行った大月地獄谷とそして先週の金毘羅ゆき位しか岩登りらしい山へ行ったことのない私にとっては、この40mの岩に挑戦すること事態、生れて初めてのことであって何か武者震いをおこすような落着かない気持であった。

岩登りの場合はスキーとはまるで逆で1級2級3級となるにつれてだんだんむつかしい登りとなる。いわゆるスキーで45°の壁に挑戦するといえ、超A級のグレンデであるが、この岩登りでは垂直な登りやオーバーハンクなんかがあるので45°の壁なんかはヘッチャラな登りと言えよう。

もちろん登ること、降り降りることとはまったく逆なことであるので比較することがオカシイのかも知れないが…。

先頭の人と連絡を密にとり、けっして勝手な行動をしてはいけないと注意され、前の人の登り方をよくみて登るように云われてロープが降りてくるといよいよ本番である。取付点はやゝゆるい斜面で登りやすかったが、10m位登ったところでハング気味になっていて手の持っていくようがなくなってきた。右手前から約1mの高さの階段状の岩になったところでモタモタしていると、武田君から、右へからだをじんわりもたれさせて階段状のところに手掛りをもっていくようにアドバイスされ、からだをななめによせて何とか一段あがるとチャンと上へ手掛りがあった。チョットしたキツカケがなかなかつかめないのである。

今まで景色等眺める余裕すらなく夢中で岩にしがみついで登ってきたが、一ピッチ目のテラスからあたりを眺めてみると、原生林からぬき出たこの地点ではナント素晴らしい景色である。目の前に小さな魚村が手に取るように見え、その向うに防波堤のある港があり、海が広がっている状景をみると高度感もヒシヒシとせまってくる。横手の方の岩場では別パーティの大槻君がルンゼコースに挑戦していたが、慣れたもので登っている途中で、「写真を撮ってんか」と余裕シャクシャクたる態度で、武田カメラマンに指示しているあたりニクイもんだ。

2ピッチ目は狭いチムニー状の登りで武田君がトップで私がセコンドで登ることになり今度はラストが石田君である。自分のからだと手足とを両側の岩に突き立て、ジワジワとイモ虫の様に登って行くわけだが、これが又狭い所でなかなかキュウクツな登りである。この地点からザイル確保をしてくれている武田君は見えないけれども適正なアドバイスを受けながらヤットコサ、チムニーを脱すると楽な登りとなり、小指の肩の地点で確保してくれている武田君がみえた。垂直を登りから斜面の登りになると何かホットする。

今度は武田君と交替して私がラストの石田君の確保をすることになった。何事も始めてなので、武田君から確保の方法を教わり、自分自身も猿まわしの猿のようにロープで確保して登る用ロープを下へ降して出発用意の合図をする。何しろ見えない相手の場合お互いのカケ声が便りになるので、大きな声で確認し合うことが如何に大切であるかということをも身をもって体験できた。

別のパーティは距離が長いのでまだ登途中であったが、その間一服してあたりの素晴らしい景色を眺めていると、苦勞して一つの事をやりとげたという満足感がヒシヒシとせまってくる。

やがて上から降りてきた岡本、大槻両君と合流して、今登ってきたところを下降することとする。慣れない間は下降する最初の降りかけが、下を見るので転落しそうな気がして不安になる。降り始めるとロープにぶらさがるようにになるので私の場合、上のロープを持つ右手の方に力はいり過ぎて、それではアカンと注意されるのがわかっていながら、つい左手でぶらさがってしまう。下のロープの右手さえしっかり持っていれば大丈夫であるとよく云われるのだが…。

今回は大槻君に借りたセルフストが上下一対になっているのでカラビナにロープを通して、全身を吊るようにして下降した。この方法ではからだ全体に平均加重となるので、肩や股が痛くなくて楽に降りることができた。何事も慣れなければいけないということで下降の練習をもっとしておか

なければならぬと痛感した。

軽い食事の後、午後からクラックルートと正面ルートに別れて挑戦することになり今度はメンバーを入れ替えて岡本、石田両君の若手パーティーと大槻君と私のパーティーで登ることになった。

大槻君が身軽に楽々と登っていくのを見て簡単そうだなあと思って、いざ自分の番になってみるとナカナカどうしてむつかしいものである。写真班の武田君が目の前で見本をみせてくれたけれど自分が実際登ろうとすると足掛りがつま先位しかなくどうしても立ち上れずモタモタしていると、今度は手がだるくなってきたので、ザイルダウンしてもらってもう一度やり直すことにする。

ハンゴに登るような登り方をせずに岩に靴を垂直に当てて登るように義弘君からアドバイスを受けヤットコサ立ることが出来た。立ち上るとうまいぐわいに次々と足掛りも手掛りもあるものである。一ピッチ目のテラスでもう一方のパーティーと合流することになっていたので大槻君から降りるように云われてこの登りは非常に疲れたし、これからの登りは人工登攀でアプミを使用する個所があったからヤレヤレ助かったと思った。

下降してから上ばかり見上げていると首がだるくなってきたので小指の裏からまわって先程のよい展望台であった小指の肩のところへ登り、今度は彼等の登りっぷりを武田カメラマンとジックリ見せてもらおうと思ったが岩の影になって上部は見えなかった。実際に登っている状態と、はたで見ているのでは遠くからみているのでハッキリわからないものである。

はるか彼方に淡路島と鳴戸海峡をはさんで四国がうっすらと見えた。よく山へ行くが海がみえる山行はあまりなかったので何か珍しい新鮮な感じがした。

翌日は雨降りになったので森林帯を頂上まで登り早々に引揚げた。

今回の山行では、最初は不安感もあったが一応の成果もありこれで今後の山ゆきの自信にもつながると思った。

第1154回例会

天ヶ峯

翠 峰

12月4日(日) 山陰線福知山駅前の京都交通バス待合室前から出る西舞鶴行バスに乗車、河守で大江山經由宮津行バスに乗換える。外宮前で下車。バス道と別れて川沿いに車道を進むと欠戸のお城のようなお寺が目につく。由緒ある古刹であろう。橋谷の発電所の所へ来ると前方の小谷に滝がかかっているのが見えた。水量は少いが相当な高さがあった。

残月が天ヶ峯の上にかかり、朝霧が晴れて好天気となった。橋谷は谷奥の緩斜面に散らばっているが、茶畑や田が可成りあり相当数の家があり可成り大きな村で裕福そうである。

舗道を登って奥で右折して林道を登り、茶畑を通して山道にとりついた。しばらくして道は消えたが、疎らな雑木林なので尾根へ登ると踏跡に出た。段々笹が多くなり、やっと東南の600m峯の

コルの北の稜線に出たが笹はますます茂っており、時間をくう。

山頂近くになって一時笹が無くなりほっとしたが、又も笹原が現れ、杉林に入って直登すると山頂に出た。北に大江山や江笠山が西に三岳山が大きく、先日登った登尾峠の無線塔がよく見えた。三角点は中央の檜苗の下にあったのを探し出した。三等であった。

昼食後寒くなったので、西から登って来ている林道を下った。荒れた林道で下ると国道176号線の峠の少し北側に出た。峠を下って最初の山田のある山道を見つけて登ると稜線の刈分けに出て△520.5mの三等三角点のあるピークに出た。探すと石の間に埋もれるようになっていたのを鉋で周囲を刈り、堀出して写真にとって少憩後、コルへ下って下野条へ下った。バス(円海)が出た後で、国道を歩いて長尾の先でやっとヒッチに成功。福知山駅前迄送って頂いた。すぐ急行に乗れた。

コース・タイム 12/4 7.05 峨嵋駅 9.11~10.00 福知山 10.22~10.30
河守 10.34 下宮前 11.20 橋谷口 12.50~13.15 △天ヶ峯 13.52 国道 14.30
~14.40 △520.5 15.20 下野条 16.20 長尾 16.40~16.46 福知山 18.20 二楽駅

島根・山口の一等三角点

坂井久光

昨年4月23・24日の両日で広島の一等三角点研究会々員の中田勇氏と二人で、広島・山口の一等三角点の山々を登り、昨秋11月19・20日の両日再び中田氏と二人で、島根・山口の一等三角点の山々を登って来た。

4月22日夜新幹線で広島の中田氏宅へ行き一泊。翌23日早朝車で出発。国道2号線を西へひた走り、徳山市から右折して北上、杉峠から左折して林道を走り道端で駐車。西谷ヶ岡(561m)へ向う。山頂に釜柄無線中継所があり、良い道がついているが車の進入禁止の立札があった。わらび・ぜんまい等の山菜をとり乍ら坂を登りつめると中継所の裏に一等三角点があった。

小憩の後下山。車で杉ヶ峠へ戻り更に北上、途中左折して鹿野町へ行き、さらに左折して林道を走り杉河内なる山村の村はずれで駐車。昼食後奥に続く荒れた林道を谷川沿いに登り、清涼寺へ越す峠へ出て尾根筋の急坂を登ると中国管区警察局の無線中継所のある石ヶ岳山頂に達する。三角点は後の岩山の上であり、展望は極めてよく、十種ヶ峯(一等△)、馬糞ヶ岳(一等△)始め、中国西部の山々が一望出来る。少憩の後展望を楽しんで下山。再び車で元来た道を南下し、須々万本郷から管野ダムを渡って錦川沿いに下り、平瀬で左折、高木屋に行き駐車。のどかな春の日を湊流沿いに山菜をとり乍ら登ると北の島の谷からくる道との峠に出て稜線沿いに登り、杉林の中で再び谷沿いになって谷奥から尾根筋の急坂をジグザグを混へて登ると笹原の高原状となり、更に緩い上下を繰返して笹道をかき分けて登ると測量旗の立つ馬糞ヶ岳山頂に達した。展望は極めて良く周辺の山山が一望出来る。「防長百山」に依れば、西麓に秘密尾なる山村があり、山名も秘密ヶ岳と某書にあ

るが、馬糞ヶ岳の由来には諸説があり、判らないとのこと。

本当に妙な名の山ではある。土産に山菜を沢山とって下山。車で広島へ帰り中田宅で一泊。翌24日車で早朝出発。北へ向って可部町を通り、吉田町を経て三次市から更に北上して峠を二・三越えて新市(高野町)に出て右折、上湯川から林道の終点迄入り、駐車。猿年に宮後部長と共に登る約束であった猿政山(1268m)へ向った。谷川沿いの道を辿って谷奥で右の小谷へ入り、道なき道を藪のある稜線へひた登りに登り、笹原に一路の踏跡らしきものが処々に残る尾根筋を登って伐採後の北斜面をトラバースして北から上っている山道を見つけて山頂三角点に達した。

雨もよりの為展望はきかず、降って来たのですぐ下山。途中の鞍部から谷へ下って古い炭焼通を辿り、滝がある美しい険谷を下降して元の谷沿いの道に出合い車へ帰って昼食を食べて出発。往路を走り、途中ドライブインで小憩後広島駅迄送ってもらって汽車で帰京した。

11月18日午後の新幹線で広島の中田宅へ行き一泊、19日早朝車で出発。2号線を西進し、岩国市へ行き、錦川沿いの国道をひた走りに走り、傍示ヶ峠を越え、六日市町を経て高津川の流域に入り、支流の吉賀川沿いに下って日原町で右折、急坂を登って須川を経て川平で匹見川沿いの車道に出て猪木谷で右折、林道の急坂を登って最奥の民家で菲早山(544m)への登路を尋ね、林道終点で駐車。傘をさして降雨の中を谷筋の山道を辿って小滝を越え、ワサビ畑を通ったりして稜線に達し、踏跡を辿って山頂の一等三角点に達した。見下ろすと、北の岩倉から山麓深く谷奥へ林道が入っているのが見え、北から登った方が楽だったが遠廻りなので仕方がない。

雨が薄れたのか、日本海が北に見晴らせた。南に燕岳(1,078m)始め県境の山々が重畳として眺められ、足下に国土地理院の点標名や標高を示した枝があった。往路下山して車で横田から国道9号線に出て南下した。

途中、青野山(△907m)の扇形峯を見る。此の山は死火山で地図(津和野5万分の1)を見ると西北の鍋山も、東南の野坂山(△640)も死火山に違いない。車は一路阿東町の徳佐駅に向い、駅前の森林組合で十種ヶ峯(△989)の登路を聞き、国道315号線を走り、市場で右折、十種ヶ峯野外センターで駐車。登山届を書いてAコースを登り、Dコースを下った。

山頂は草原で360°の展望がき、既登の一等三角点が見られ、青野山が見えた。冬はスキー場になり、県下で最も人気がある山の一つだそうだ。下山後車で往路徳佐から9号線で木戸峠のトンネルを出た所で萩市への国道へ右折して日南瀬から再び左折して林道に入り長瀬を通り、小吹峠へ向う。林道が峠の南側に高津へ向って工事が進んでおり、旧峠が車で走ると判りにくく、下車して地図と見くらべてやっと小吹峠の旧道が判り、ダツヤ山(△746m)を目指したが、日が暮れかかり、ダツヤ山頂に達せず時間ぎれで下山。

佐々並市の林屋旅館で一泊。翌20日、早朝出発。北の成川部落から南へ突上げている成川川の林道を走り、田の果てる地点で駐車。林道をつめる。5.6分程歩くと終点で小道が川沿いに続く。成川川は水量豊かに岩壁を急流が流れたり、川原を作ったり、なめ滝をかけたりして都会に近かったらハイカーやハン盆炊サンに人が沢山来るに違いない美しい溪流であった。途中5.6mの滝で少憩、滝の上手から前方のダツヤ山に続く尾根に取付くべく小谷へ入ったが、イバラや笹やつるに

悩まされ、やっと稜線に出ると踏跡があり、尾根筋に合すると笹深いのが、切開きがあって山頂の標柱の立つ一等三角点に達し、二人で万才三称が少憩して下山。展望は南にショウゲン山や西に男山が見え、林間であったが可成展望がきく。ダツヤの宛字は脱耶一駄艶と書くがその由来は防長百山の阿倍さんも知らないと云う。この山は余り登山者の来ない山らしくその形跡がなかった。帰路は稜線の切開きを昨日登った長瀬の谷の峠へ下り、峠の古道を発見して喜んだが、笹の茂る谷へ下るとたちまち道跡は消え、水苔と野イバラが縦横にはびこり、踏みつけたりかきわけたりして谷を下ったが広くなる迄悪戦苦闘の連続で帰って見たらズボンの上から傷が股に沢山ついてた。やっと谷川沿いの道に出て、コーヒーを沸かして二人で飲んで一服。往路を谷川沿いに駐車地点に戻り、車で国道を山口経由、防府市に出て、大平山(△631m)のケーブル駅へ行き駐車、ケーブルで山頂駅へ。駅から急坂を10分位登るとテレビ塔や無線塔の立つ山頂に達し、三角点があった。展望は極めてよく皇生山や瀬戸内海の風光が眼下に開け、既登の山々が遠くかすんで見えた。再びケーブルで下山。車で国道2号線を東進、広島の手前で下車。汽車で広島へ行き新幹線で帰京した。

* 「防長百山」 マツノ書店発行 2,000円 送料200円をつけて、著者 阿倍正道
744(下松市中市)へ申込みこと。

江笠山と荒神谷

田 中 忠 久

京都府下に三角点(1.2.3等)の設置された500m以上の山は182山あるという。坂井さんにその一覧表をいたされたが大変な力作である。坂井さんはその山を全部登る予定だという。「それは大変だな」と云うと「いや、あと43山だから」と涼しい顔である。私にはとても出来そうにもないが、その一端に少しでも触れたいと選んだのがこの江笠山727.8mと荒神谷(点標名)571.9mである。私は三岳山839.2mに登りたかったのだが、これは坂井さんがすでに登られていてダメ。

12月7日 京都駅発6時46分の福知山行の列車に乗る。福知山まで90kmを2時間25分かかった。帰りはなんと2時間49分である。同じ距離でも東海道線の大坂～能登川間は1時間30分、新幹線なら40分くらいだろう。なんともんびりした山陰線の列車だが別に急ぐ旅でもなし、博学の坂井さんにいろいろ話を聞かしていた車内は退屈することもなく結構楽しかった。

福知山に着いて、バスの発車時間まで1時間半程あったのでタクシーを奮発する。国道175号線から176号線へ、与謝峠の手前、仏谷でタクシーを降りる。10時15分であった。¥3,240

仏谷の林道に沿って登っていったが、道はだんだん悪くなり、峻険近くで消えてしまったが、たいした苦勞もなく江笠山の500mほど南の府県界稜線に登る。道はなかったが、下生えの枯れた冬の尾根は歩きやすく20分程で江笠山頂に達した。大江山のすばらしい展望台であった。

南の三岳山もなかなか高く立派だ。北方の丹後の山々もすばらしい山波を見せていた。三角点は2等を予想していたが3等であったのは意外だった。

山頂(11.50~12.20)で昼食を済ませ、南へ府県界尾根を縦走する。舗装された立派な2車線の車道のある神懸峠(13.50)を経てさらに南へ、荒神谷三角点571.9mに登る(14.45)。冬木立の中の三等三角点であった。三角点から東へ急斜面の植林の中を下り、横尾を経て雲原のバス停に出た(15.40)。バス時間まで1時間程あったので、天ヶ峰が正面に見える道端に腰を下ろし、坂井さんが沸してくれたコーヒーを飲みながらいろいろ山の話をした。実にのんびりとした気持ちのよい安いだ一刻であった。バス(16.35)で福知山(17.30~17.57)に出て帰洛した(20.46)。

1/5万図「大江山」

例 会 報 告

例会№	目的地	月 日	天候	担当者	参加者	記 事
1152	山の清掃 天 王 山	11月 27日	晴	本局 宮後 正樹	近藤 薫氏 中村維源氏 広瀬 烈	天王山の清掃は思ったより大変な仕事だった。山頂で一部のゴミを燃したり埋めたりしたが、持って下りたゴミも多かった。これは6年前の山の清掃の報告である。そして6年、天王山は少しづつ美しくなって来たようだ。今年に入ってからも何回か地元の人達やボーイスカウトが天王山清掃をされたらしく、持って上ったゴミ袋が余るほどであった。前日からの雨で心配された天候もすっかりよくなり、秋晴の下、山頂では子供達がボール遊びに夢中になったりして、清掃というよりもファミリー登山のような雰囲気楽しい一日を過ごすことが出来た。ご苦労さまでした。
1153	靈 仙 山	11月 29日	晴	横大路 井上 国雄	大西 純一 進藤 義治 小林 達雄 出中 忠久	栢原道を登る。心配された天候もすっかりよくなり、秋晴の下、秋の名残りのすばらしい靈仙山であった。360°の展望もすばらしく、とくに奥びわこの美しさはいつまでも見あきることのない光景であった。下山は樽ヶ畑コースをとり、養鱒場を見物してタクシーで米原に出て(¥1,500.-)帰京した。
1154	天 ヶ 峰	12月 4日	晴	本局 坂井 久光		参加者がなかったので単独行で予定のコースを登ってきた。 別稱報告

雑 報

▲ 12月集会報告

12月8日 下鴨寮

出席者 名誉部員 山村敏郎氏、近藤 薫氏
本 局 武田、大槻、三橋、岡田、坂井
梅 津 吉田
九 条 広瀬
以上 9名

例年行っている山の清掃が、今年で満10年となり、一応の成果はあったが、今後はふだんの山行で常に「ゴミを残さない」という心構えて、他の模範となるよう心掛けていこうと話合った。

▲ 京都府下30山例会について

宮 後 正 樹

来年、昭和54年の7月京交山岳部では創設30周年を迎える。記念行事としていろいろ意欲的に検討が進められているが、欲ばった見栄っぱりな背背のびしたものでなく実行可能な京交らしいしかも誰でもが参加できる山行計画を中心としたものにしたい。

山行には海外登山、国内遠征もあるが、先ず地元の山、京都府下の山をもう一度見直し30周年に因んで30山を選んで皆んなで登ってみてはどうだろう。

府下30山というからにはできるだけ府下全域から候補の山を選ぶのが望ましい。たまたま府下の500m以上の三角点182座について調査された坂井久光君の労作も活用させてもらって5万分の1図府下26枚のうちから最低1枚に1座の500m以上の山を選び、なお不足する分を等級、標高などを勘案して補充し30山を選定することとした。

実施にあたっては無理のないように1月1山を着実に登ることとし30周年の54年度中には全山完登を目指して53年1月、今月から例会を持つこととした次第である。

部員各位のご協力をお願いし、京交山岳部創設30周年記念、京都府下30山例会スタートの弁としたい。

▲ 部費受領

52年前後期

烏 丸 石田和男

部 員

昭和53年1月1日現在

132名

名誉部員

近藤 薫
 森下 村重
 故 奥村 厚一
 多 人代
 伊藤 潤治
 中村 維源
 牧 定夫
 田中 定勝
 山村 敏郎
 畑 照
 王生 そと

本 局

原 勝治
 三浦 貞義
 平田 嘉輝
 木下 嘉造
 吉村 忠行
 村 宗松
 宮本 吉章
 長谷川雅也
 武田喜久郎
 田中 明
 坂井 久光
 上島 和彦
 西村 克巳
 世古口 陽
 宮後 正樹
 大切 照男
 関本 俊雄
 上原 昭二
 渡辺 朋子
 大槻 雅弘
 相田 正雄
 上田 隆
 加地 卓男
 前田 文男
 藤田 民栄
 三橋 勉
 佐々木敏夫
 山田 富男
 津田 実
 水谷 俊夫
 菅 征三
 猪飼 康夫
 若山 裕孝
 岡田 茂久
 大沢 泰

池田 弘之
 楠 とし子
 井上 一夫
 柳田 晃
 小西 正明

九 条

羽根田一男
 田中 忠久
 伊地知文男
 山田 精一
 広瀬 烈
 鷺見 敏一
 石田 幸次
 八木 孝
 高橋 明
 滝 裕
 沢井 佳三
 山部 俊夫

梅 津

中島悠紀夫
 蛭子野俊雄
 横田 義一
 榎木 敏夫
 吉田 武
 徳野 治
 徳田 真三
 入江健治郎

高 野

山畑 敏和
 亀井 昇
 醍 醐
 東 昭次
 岡本 勇
 西村 卓司
 守山 寿彦
 北川 晃

市 役 所

中山 忠之
 井上 修一
 大伴 嘉男
 山崎 文夫
 松村 勝義
 木原 滋
 大前 茂
 須原 均
 河島 健次
 道端 清

烏 丸

石田 和男
 北林 修一
 塩野昭三郎
 山下 周道
 河村 清
 井上 英雄
 今井 武夫
 尾崎 重夫
 田村 忠司

西 賀 茂

渡辺 智生
 浜田 政治

五 条

田中 繁行
 世古口了以
 高橋 豊次
 大倉寛治郎
 盛出 一郎
 盛田 雅樹
 歌川 孝
 谷口 義治

三 哲

村野 忠雄

横 大 路

大西 純一
 進藤 義治
 清水 譲
 井上 国雄
 福田 延行
 小林 達雄
 岡本 義弘
 大畑 正吾
 山川 芳次

錦 林

松岡伊太郎
 赤井 清一
 岡本 登
 生田 敏雄
 山本 裕康
 山口 修
 高窪 暉夫
 林 茂男

八 条

川村 博善
 井上 豊
 飯原 京二

北 野

坂田 利春
 井本 真
 台川 敦美
 西田 孝夫
 福本 久雄
 牧野 健

HIKE & CAMP

この用具の事なら「コニシ」が一番です!

御来店ありがとうございます

山とスキー レジャースポーツショップ
そして 海の



中・二条通河原町西 TEL231-1208

帆布・濾布
テント・シート
雨合羽

木村工業有限会社

京都市中京区ミブ車庫前
TEL 801-5331 (代)

名古屋営業所
名古屋市西区児玉町7-30
TEL 521-7541代~4

テニス用品
スキー用品
山用品

交通局の皆さん
とりあえず 京菱へ
満足のいくようにします

京菱運動具店

下・大宮松原上ル
TEL 801-1331

お馴染みのスポーツ店

一般スポーツ用品・用具
家庭用体操器具

購買証でご利用下さい

KK 西沢スポーツ

中、釜座御池下ル
TEL 221-5739

昭和53年1月1日

京都市中京区壬生坊城町48


京都市交通局 京交山岳部

PRO SHOP
山とスキー **チロル**
輸入品とオリジナルの店
AM 12.00 ~ PM 9.00 三条御幸町下
定休日 月曜日 (221) 6186

HORIIKE まかせて下さい…ネ
KYOTO **山とスキー**
のことなら一
☆在庫豊富にとり揃えています
☆山の道具は“ゼヒ”御相談下さい

山とスキー専門店
ビッグホリイケ
河原町店 上・河原町通丸太町東入
烏丸店 中・烏丸丸太町南下ル東側

真の専門店として
好日山荘は前進しております
山とスキー用具の
ことなら御まかせ下さい
確信ある用具を
確信ある価格で…
好日山荘
河原町六角下ル東入
TEL 241-1731



山とスキーの店
京都 あるむ
京都市中京区新町三条上ル
☎075-255-0288

京都最高のアクアラング用品専門店

- ウェットスーツ製造直売
- 潜水器具特別割引販売
- 現役プロダイバーと全日本潜水連盟公認指導員による
安全確実な潜水指導 (毎週木曜 夜7時ヨリ)

ダイビングプロショップ エリート	スキューバプロ (米)	京都総代理店
	スキューバアプロ	京都総発売元
	AMF ポイト (米)	京都総代理店
	テクニサブ (伊)	京都総代理店

603 京都市北区堀川通北大路上ル東側 TEL 075 (492) 8450